



## びゅあ富士男女共同参画推進月間記念講演会を開催しました

令和5年6月4日（日）にびゅあ富士男女共同参画推進月間記念講演会「メディアとジェンダー」を開催しました。仮施設に移転後、初めての講座開催となりましたが、会場の団体活動室の定員いっぱいになるほどの多くの方にご参加いただくことができました。

山梨県で定めた6月の「男女共同参画推進月間」にあわせて、男女共同参画に関する知識があまりない方にも関心を持っていただけるよう「メディア」という誰もが日常的に触れるテーマでの講座開催としました。メディアが社会に与える影響はとて大きく、意識形成や人格形成に深く関与します。テレビ放送が始まってちょうど70年を迎えるこの年に、ジェンダー平等とメディアの深い関わりや、テレビドラマ・CM・報道のあり方をジェンダーの視点から考える機会としました。

講師には、谷岡理香先生をお招きし、ご講演いただきました。谷岡先生は現在、メディア総合研究所長としてご活躍されており、かつてはテレビ高知報道部アナウンサーや東京にてフリーランスアナウンサーとしても活動されました。自治体や女性センター等でのメディアリテラシー講座の指導経験豊富な先生でいらっしゃいます。

講座では、年表や実際の写真、映像等を通してテレビが描いてきた女性像・男性像を振り返りました。1980年代頃までのテレビドラマは、女性は「母」として描かれることが多かったのが、2000年代以降は働く女性が主役の作品が出てくるようになりました。また、「専業主夫」が主人公として登場したり、DVや性同一性障害をテーマとした作品が誕生したりと、時代の変化とともに描かれる男女像や扱うテーマも変わっていったことがよくわかりました。子ども向け番組でも、主役のキャラクターは男の子であることが多かったのが、最近では男女比に差はなく、どちらの性別でもないキャラクターも登場し、性別に関係な



くありのままの自分として活躍し輝くキャラクターが登場する番組も多くなってきているようです。



また、CMに積極的に家事参画する男性の姿がよく登場するようになり、「2人のパパ」が出演するCMも目にするようになる等、多様性が広がっていることもわかります。

メディアが送る「メッセージ」には、作り手の価値観が色濃く反映すると谷岡先生はおっしゃいます。キー局の報道・制作・情報制作現場では、2019年の時点で最高責任者である「局長」のポストに就く女性はゼロだといわれています。このことから、何を伝えるべきニュースと判断するかを決定する場に“女性がいない”という状況が垣間みえます。番組を制作する過程に、より多くの女性が参画することで、番組内容や取り上げるテーマ、描き方も大きく変わる可能性があります。多様な男女像や家族像を描くには、送り手側にも多様な視点が求められることがよくわかりました。

メディアが発信する表現は、日常的に見聞きし続けることで、人々の物の見方や価値観に大きな影響を与えます。テレビドラマに取り上げられることで人々の認知度や理解が進むこともあれば、偏った描かれ方によって固定観念を生じさせる危険が生じることもある等、メディアには表裏一体な側面があることを受け手側である私たちが認識し、情報をそのまま受け取るのではなく、自分で考え読み解くスキルを身につけていくことが大切だと改めて気づくことができました。

ご参加いただいた皆様にとっても、メディアの受け手として気づきの多い講座となったことと思います。ご指導くださいました谷岡先生とご参加いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

